

## 抑留記

千葉県 庄司音松

### 生地獄

私は満州国孫呉第四四八部隊に入隊。二年兵のとき、炊事勤務を命ぜられ、菜切、肉切りと一応炊事の事は何でもさせられた。

炊事当番とは陸軍では中隊で成績の悪い者がするものと決め付けられていた。しかし、私にとつてはこの炊事当番をさせられた事によって抑留されてから良い結果となって表れた。

いよいよソ連参戦によって私は孫呉で武装解除され、遂に虜囚の身となった。

お前達はすぐ東京へお帰りだとの甘い言葉を言われ、来る日も来る日も埃で激しい道路の行軍が始った。

四、五日行軍をしたところで黒竜江の沿岸に出た。そこには台舟が待っていて、翌日ソ連領に渡

された。そのとき見た顔が東洋人ではない人の顔。私は何か遠くに来たんだという嫌な感じがしたのは、やはり虜になった身であつたためであらうか、もう日本には帰れないのではないか、嫌な予感がしてならなかつた。

またも行軍が始まつた、或るときはアルコール（集団農場）でジャガイモ掘りもした。そしてそのジャガイモを生で食べた事もあつた。が、そのジャガイモが林檎の様な味がしたが、それは空腹のためであつたからでしょう。

また野営をしたときであつた。水がなく致し方なく湿地の水を飲んだ人も何人かあつた。その水にはボウフラがわき赤痢菌がいっぱいで、飲んだ人はすぐに薬を飲めば病気にかからない人もいたが、アミーバ赤痢にかかつた人が相当いた。私の戦友もそのアミーバ赤痢にかかり血便を出し始めていた。その時ソ連将校は伝染病にかかつた者は銃殺すると、大隊長を通じて皆に連絡させた。

私は戦友がかかつたのを口外せず、一緒に行軍

をしていた平田軍医に相談した。平田軍医はこの薬を飲ませると丸薬をくれた。その薬は効いた。一生懸命帰らなくてはと思っていたからでしょう。翌日はすっかり元気を取り戻していた。私も共に安堵した。

また行軍が続いた。幾日過ぎた事であろうか、風呂には入れず、毎日の砂埃、誰の顔を見ても皆何か黒黄色に見えた。また小休止をすると背中、腹あたりを虱が歩いているのがよく分るが致し方がない。またも行軍が続いた。すると今までになかったちよつとした町に着いた。これはライチハという町であった。

ここには日本人によく似た人が大勢いた。その人達に「あなた達は日本人ではないか」と問うたが何等一言も口をきいてくれなかった。私達は勝手に想像した「これはノモンハンの事件で捕虜になった人達ではないか」と。

また行軍して約半日歩き続けたところで山を行軍していた。下を見ると収容所が見えた。それに

は幕舎が四つ張られていた。そこに入れられるのではないかと皆で話していたが、案の定その収容所の前に止まり、大きな扉の中に私達は入れられ、二十日間のうちに越冬準備せよ、もうすぐ帰る、希望は失われた。その収容所の下は炭鉱であった。

越冬準備を始めて一週間ぐらい過ぎたある日、この中隊で炊事の経験のある者はいるか、夕方であったが、私は「はい」とばかりに手を挙げた。翌日から炊事作業の準備で二交代制で勤務になった。十一時交代で夜と昼に交代した。

食いたい、寝たい、帰りたい、この一つを充たしてくれる炊事であったので、皆の羨望の的であった。

一カ月過ぎたころであったが、収容所の中から夜、目の見えなくなる者が多発した。平田軍医にそのわけを中隊から告げたが、軍医曰く、「野菜がないためビタミンAが足りないんだ」と言っていたそうですが、食糧が食糧だけに何とも処置方法はないとの事であった。

シベリアの初めての冬を迎えた。この一冬で随分と亡くなられた。春が来て炭鉱に入れられた者の多くは骨と皮になっていた。その栄養失調寸前の人を約二百人、どこか軽作業でもさせるのでしよう。この収容所から去っていった。

次に二百人ぐらい丈夫な人達が収容所に入ってきた。

その翌日であった。ここに千葉県佐貫の出身者が居るようですが、炊事場に入って来た人があった。

「私ですが」

「あなたでしたか、私は岩入の藤平という者ですが」

「では岩入の藤平武君、御存知ですか」

「それは私の弟です」

私は吃驚して、藤平武君は戦死したそうです、私の父からの手紙で知りましたが「私は知っております」

弟の藤平武君と一緒に部隊に入隊して一緒に渡

満し、藤平君は二中隊、私は一中隊、と別れましたが、同じ土地から出たということで親しくして一緒に写真を写したりした事もあったり、その写真がいまだに残っている。

縁とはどこにあるか、弟と一緒に軍隊に出てシベリアで兄に会うとは、夢にも思わなかった。

夏が来た。日中は暑い日陰に入ると涼しい。だが炊事場には無数の蠅が飛んでいる。ソ連の軍医大尉（通称私はタークと呼んだ。それは口にタバコをくわえてオーダーク、オー、タークと炊事場に入って来るからである）。その大尉が入って来ると汚い蠅がいっぱいいるではないかと怒られるので、来る前に一カ所窓を開け、皆で上衣を振って隅から蠅を追って外に出す。しかしその蠅がブーンと音をたて気持ちが悪いくらいだったが、何分ともかからないうちに、また炊事場に入ってきている。

この夏の事であった。主食としてニシンの塩漬けが一樽配給になってきた。では皆に配給しよう

と樽をあけたところ、プーンと臭気が甚だしく、完全に腐っていた。

例のタークに先ず見せなければ代わりの食糧がもらえない。急ぎタークを呼んだ。そのタークもこれは食べてはならんと同調した。

さて、その腐ったニシンの処分方法、どうしたら皆が食べないか、穴を掘って処置したら、これは必ず掘り返す。思案の末誰かが便所に捨てたらどうか、これを採用することに決めた。

ではその便所とはどんな便所かと言うと、先ず横型に穴を掘り、それに板を乗せてあり、その板の上に乗る用を足す。穴の両側には後ろに流れる様に溝が掘ってある。うしろの方は大きな穴を掘り、そこが溜となっている。

そこに捨てようと皆で相談がまとまった。腐ったニシンを次々にその糞溜の中に投げたがニシンは糞の中に入らずに浮いている。

次の瞬間、そばで見ていた私達の仲間がその溜の中に入って行くではないか、それを見ていた大

勢の仲間がやはりその溜の中に入って行った。最初に入った人は糞の中のニシンを拾い、蛆を振り払って食べるではないか。これは大変、皆伝染病で死んでしまうぞ、と致し方なし。ソ連の警備兵を呼んで銃でおどかして解散させた。

残ったニシンは全部糞の中に沈める処置をとった。

しかしながら、現状を述べた様に、そこまで空腹を、我慢を重ねて栄養失調になり理性を失うまでは、どんなに辛い思いだったか、幸いにして伝染病は一人も出なかった。

現在の日本は経済大国として食物が豊富にあり、この書いた事は想像もつかないと思いますが、テレビ等で頭からビールをかけて喜んでる姿、また先日ある上棟式にも頭からビールをかけて祝っているというのを聞いて無性に腹が立った事を強く覚えています。またテレビでケーキのぶつけ合い、食物を本当に食べ物と思わないその姿は、遠いシベリアの地でひもじい思いをし、栄養失調

で亡くなられた方を思い出すと同時に何ともった  
いない事だ。先ずこの言葉が先に立つと同時に食  
糧もなく淋しく亡くなった当時を思い出し、今  
我々の食糧の半分でもソ連からもらえたら仲間は  
死なずに日本に帰れた人も多々あった事と思うと、  
涙の一筋が落ちていくのおぼえます。

#### 友の死

五月初めになるとシベリアもようやく草木が活  
動してくる。この時季が我々抑留生活にとつては  
防寒具も軽くなり動くのがいくらか軽くなつてき  
た。

暖かくなるにつれ、お帰りの話が流れてくる。  
そんな噂は嘘とは知りながら希望が湧き、何より  
も楽しみの一つであった。

零下何十度という恐ろしい寒さも終わった。こ  
の寒さを味わずに何とか日本に帰りたいものだ。

この収容所に入れられてから一冬を越し七カ月  
が過ぎたが、何年も過ぎた様な感じがする。あま  
りにもいろいろなさがありすぎた。

食糧は粟、コウリヤン、麦等であったが、それ  
も腹いっぱい食べさせてくれるならばいくらか力  
も出るが、それは飯盒の半分に三分か四分粥程度  
のものであった。この食糧でノルマを達成するの  
には炭鉞に十二時間以上入って労働しなければな  
らない状況であった。

この一冬で栄養失調や肺炎で何人亡くなったこ  
とであろうか、直ぐ帰れると思っていた私達が収  
容所に入れられ、強制労働させられ、精神的な打  
撃があった事も大きな原因の一つであった。

夢に見た日本の土を踏む事も出来ず、肉親とも  
会うことが出来ず、ただ毎日の労働で極度の疲労  
のうちにむなしい帰還を待ちわびて祖国日本を夢  
に見、肉親の名を呼び続けながら尊い生命をこの  
シベリアで失った我々の同僚は何人あったらう  
か。

私と苦労を共にした戦友も当時三十八歳で、名  
は鈴木国武といった。非常に落ち着いた人で、学  
校は当時の通信官吏練習所出身とか言っていた。

その人は妻子があり、再会を非常に夢に見ながら、それを果たす事もできず、冷たいシベリアでこの冬帰らぬ人となった。どうしてもと体を大切にできなかったのだ。悲しみと悔しさがいっぱい気持ちで泣きながら彼を葬った。

亡くなったその日の朝、彼は頭痛を訴え熱も相当あったらしいが、作業に出され坑木の貨車おろし作業をした。そのときは肺炎で仕事をする状態ではなかったそうである。その帰途に息を引き取り、仲間の手で戸板で運ばれて来たが、その体は凍っていた。

亡くなる一週間ぐらい前のことであつたらう、私に腹が空いて苦しいと言つて来た。私は運良く炊事勤務であつたため、昼食の黒パン（三五〇グラム）を食わずに持ち帰っていた。そして仲間の人達に少しづつでも腹の足しになればと思つていた。その黒パンを彼に与えた。彼は私の毛布の上に腹這いながら黒パンをむさぼり食つていた。腹が空いたらいつでも来いよとの私の言葉にニッコ

りうなずいたのが最後の別れであつた。

一緒に作業をしていた人達の話によると、熱にうなされ最後まで妻子の名を呼び続けて息を引き取つたとの話を私が戦友であつたため詳しく話してくれた。

夜、私は彼を安置してある部屋に粟粥に箸を立てて持つて行こうと思つたが箸は立たない。お粗末な粥であつたが彼の枕元に供えた。

火の気のない寒い部屋で凍つた彼を見たとき涙がとめどなく流れ、その涙を拭う気持にもなれず、また彼の顔をまともに見る事も出来ず、ただ呆然ぼうぜんと手を合せた。翌日彼を埋めるとき、私は心に堅く誓つた。俺は絶対に生きて帰るぞ、そして君の妻子に必ず伝えるぞ、生きる決意を新たにした。

シベリアでは暖かくなると山も野も草木が一斉に活動する。青々とした草木を見る度に故郷を思い出し、また室内で板の上に、たった一枚の毛布にくるまって寝ているときでさえも父母兄妹の顔が目に見え、または空腹のために大きな大福餅

や豆腐と油揚げの味噌汁、銀めしが眼の前を走って行く。この思いが募り募りすると疲労と共に気が狂ったようになり、収容所の高い塀に四隅の望楼からマンドリン（軽機関銃）が火を噴いて撃たれるのも分ならず、夜中にその塀に飛びついていてる者もあつた。生地獄とは正にこのことであろう。でも暖かくなるにつれ薄着になれることは何よりも私達を疲労からいくらかでも救ってくれた。

収容所の食糧は前にも述べたとおりお粗末なもので、この食糧で炭鉱に十数時間も入れられては、いかに頑強な者でも五カ月も過ぎれば骨と皮になり、顔は浮腫、皮膚はカサカサに油気がなくなり、さながら死を思わせる姿になったが、暖かくなつたせいかいくらか皆も元気が出た様な気がする。

ある日の夕方であつた。私と同室の西野（仮名）という男が自分の場所で衣服を一生懸命きちんと枕元にたたんでいる姿が目にとまった。「オーイ、どうしたんだい、急に変わった事をして」私は思わず声をかけた。「もうお帰りだよ」西野は疲労

の濃いむくんだ顔に微笑を浮かべて言った。私はそのニュースはどこからだコンコンさんか、と皮肉めいた事を言ったが、西野は黙ってせせせと服をたたんでいた。実際、この収容所でいつ帰れるかは誰一人として知らないのだ。また知ることすらできないのだ。材木の貨車おろし作業に行く、たまたま「お帰りは近いぞ」なんて書いてある。

同じ日本人が木材積み込みのとき書いたものであろう。しかしその文字がいかに私達に力をつけてくれた事か、何回もその字を見に行ったものだった。食うこと、寝ること、お帰りの話、これだけが私達すべての望みで生き抜いてきたのだった。ソ連娘の豊満な姿を見ても欲望など探したって一片も無かつた。

楽しみの一つのこのお帰りを占うのが彼、西野であつた。キツネを呼び出して、イロハ文字と○から九までの数字を書き、箸を茶碗の上に十字に載せ、西野が何か唱えてキツネを呼ぶ。そして他の者が「お帰りはいつか」とお伺いをたてる。す

ると西野が目をつぶり箸で字の上を指して答えをするらしい。私は戊年だからその場所に来てはいけないと言うので一度も見たことはなかったが、これがコンコンさんの占いだった。初めて占いをしたときは敗戦の年の十月であった。「全員十二月に帰る」と出た。その話を聞いたときの嬉しさは例えようもなかった。しかし十二月が来、一月が来ても移動する気配はなかった。第二回目は四月説。三回目は六月説、その日が来ても空しく過ぎていった。それでもコンコンをすることが何も分からない収容所内の私達にとって、占いが外れることは分かかっていても唯一の慰めであった。

西野はその晩十一時、作業交代で貨車に石炭積作業に出て行った。その翌朝のことであった。西野が逃亡したという噂が広まった。夜中の二時か三時ごろらしいとの事であった。作業隊長は西野探しに懸命の努力をしたが、何ら手がかりもつかめないまま、翌朝作業隊員を引率して収容所に帰って来た。それから間もなく西野が捕まったそう

だと話が広がった。一、二時間も経つたろうか、急に収容所の鐘が打ち鳴らされた。全員集合である。私は集合が遅かったので後方に並んだ。皆作業に出ているので並んだ人は少なかった。そしてソ連将校が壇上に上り、そして通訳も上った。先ずソ連将校が通訳を通じ、西野の逃亡が告げられた。次にソ連の国境は逃げようとしても逃げられないのだ、逃げようとする者はこの姿になるから見ろ、と西野を菰に包み、それを縄で縛り、丸太で日本人二人に担がせ壇上から皆に見せたのであった。菰は血で染まり、血潮を太陽が照らしている状況は何とも異様な感じであった。同僚達より小さな声ではあるが怒りの声も聞こえた。

その西野が殺された状況をソ連の倉庫番の老人から聞いた話によると、腹が空いて苦し紛れに逃亡したのか、または精神状態が異常な状況であったのか、糧秣倉庫に潜入し、そこで缶入りソーセージと黒パン、砂糖を腹いっぱい食べ、隣の倉庫が拳銃倉庫なので、その拳銃一丁に弾込めをした。



しばらくぶりで味わう満腹感、それで用便がしたくなったのであろう、用便をした跡があったとの事だった。拳銃をしっかりと握ったまま満腹と疲労でウツラ、ウツラと眠ってしまった。

明け方ソ連の倉庫番の老人がガラリと戸を開けた途端、彼は吃驚して飛び起き、いきなり持っていた拳銃で老人めがけて撃った。だがその弾は老人の肩をかすめた程度であった。

その老人は驚き大声を出して助けを求めたので駆けつけたソ連兵に頭を撃たれ、その場で射殺されたとのことであった。

ふと昨日の西野の姿を思い浮かべた。そうだが、そうかもしれない。彼は私にもうお帰りだと言っていたが、本当に魂は日本に、そして郷里の我が家に帰ったであろうか。

心から御冥福をお祈り致す次第です。  
鈴木国武氏については私、復員後ラジオの尋ね人放送に依頼して家族の人にその実情をお話をすべく放送をお願いしましたが、家族の方ではなく

学校の同級生から連絡があり、浅草でお会いし一部始終話しました。だがしかし、彼の家族は満州におりましたので果たして日本にたどり着いたでありませんようか、当時は不安な気持ちでいっぱいでした。

幸ある事を心から御祈りする次第です。

帰還

抑留されて三冬が終わり、春が訪れた。誰の口からも今年には帰れるのではないか、不安の中にもいくらか希望を持った言葉が出る様になった。

三月の初めであつたらうか、誰からともなくお帰りの話が広まった。今度は本当だろう。今まで嘘をつかれつかれ今日まで来たので半信半疑の気持ちであつたが、今度は本当であつてくれればいと願わずにはいられなかった。

それから二、三日過ぎたころであつたか、元憲兵、警察官であつた人達はこの収容所から突然トラックに乗せられいすことなく連れて行かれた。それから一日か二日後であつたか全員陰部の毛を

剃れと命令が出た。

皆一列に並び、剃る人が三人、六尺の木の椅子に仰向けになって剃ってもらう。回りには皆が見ているが誰一人として笑う者もない、いや笑う元気もないのだ。また恥ずかしい気も全然ない。ここまで私達は心身共に疲労していた。また、何のために剃るのかはソ連側の看護婦マカロという女に聞いてみた。それは虱がいるから剃るんだと言う返事だった。

そのマカロという女、歳は十八歳で太り気味の大きな女であったが顔はまったく悪いというほどでもなかった。

次に毛を剃ったかどうかマカロが検査することになった。日本の十八歳の女性では到底その検査は拒むことでしょうが、向うの女性は平気であった。我々を一列に並ばせて一人一人ズボンを下ろして見る。私もマカロの前でズボンを下ろして検査を受けた。日本に帰れるなら何回でも見せてやろうとも思った。

いよいよ私達は装具を背負いギルダールの町に向かつて行軍が始まった。

収容所は山間の谷間にあったために作業に行くにも山を越えなければならなかった。私達を通るその山には道らしい道はない。その山の頂上まで来ると皆小便を必ずというくらいした。誰言うもなく、その峠を小便峠と名づけた。

その小便峠に来た時、皆一斉に放尿を始めた。この小便峠ともお別れだ。ただ感無量で別れを告げた。その峠から収容所を見おろして、この収容所に私達は二年間もお世話になったんだ、ご苦労様でした、二度と来ることはないだろう。

ギルダールの駅に到着した。名ばかりの駅である。そこには貨車が待っていた。早く乗りたい気ではないだった。

その時服部（仮名）という男が呼ばれた。何事かと思ったら、その服部を小屋の中に入れ鍵をかけてしまった。彼は若い組だった。何のために入れられたのか、私達とは到底一緒に帰れないのだ。

彼は鍵をかけられた小屋の中から、帰してくれと泣きながら叫び続けた。私は可愛そうでならず、ロスケのところに行き、出して私達と一緒に帰してくれと頼みこんだが、頑として彼らは鍵を開けなかった。

また、通訳に話をする様頼んだが絶対に話にならなかった。通訳から聞いた話によると、彼、服部は旋盤工で高度の技術者なので、どこかに連れて行かれて、また労働させられることでしょう。

列車は静かに動き出したが服部の号泣と「帰してくれ」の絶叫は続いていた。私も共に涙がとめどなく頬に流れていた。

幾日走り続けたことであろうか、私は貨車の中で炊事当番を続けていた。移動用釜二基を貨車に取り付け、周りは薪を積み込んであった。しかし貨車には煙突がない。表は四月初めとは言え寒いが中は煙でもうもうで、誰の目も真赤になり涙ばかり出る。その上周りの薪が列車の振動で崩れてくる。しかし皆交代で寝なければまいってしまう。

私は一晩中体で崩れそうな薪を押さえていた。翌日は煙で目が腫れあがっていた。

またそろそろ皆不安になってきた。果たして帰れるだろうか、列車は走り続けている、まれに登り坂になると二台の機関車で引っ張っていた。

幾日走り続けた事だろう。私はドアを少し開け、移り行く景色を眺めていた、未だ雪が解けず残っている。しかし解けた雪の間から地肌が見え、何か春の匂いを感じさせた。

ほんやり眺めていた私の目に山肌が見えた。私は突然「海が近いぞ」と叫んだ。仲間がどうしてだと真剣に聞いてくる。

私は海の近くで生まれ育ったんだ。俺の海岸の岩石と似ている、必ず海が近いと私は自信を持って答えた、それから約一日走って待望のナホトカに到着した。それは夕暮れ近かった。

すぐ収容所には入れず、移動用の釜を海岸に据えここで一晩過ごすのだ。私達は野宿はお手もののだ。また帰れるという希望が私達を勇気づけて

くれた。

まず夕食を作らなくてはと、私達炊事要員は第一に水、これは作業員を募集、五キロメートルぐらいの所から運ばなくてはならない。その準備をした。第二に海水を運んで粟粥の味付けにする。

しかしどのくらい海水を入れたらよいかおおよその見当だ。私は素足になった。波打ち際には氷が張っているナホトカの海に入った。冷たい、もの凄く冷たい、足が切られる様だった。一分とは入ってられない。砂が入らぬ様急いでくみ、それで粟粥を作った。食べた時はその割ではなかったが少し経つにつれ辛い、皆水がなく、一晩中辛さで苦しんでいた様だった。

このナホトカまでソ連軍医大尉が一緒について来た。ナホトカに着いて間もなくであった。その軍医大尉が私に向って「日本にこんな大きな海があるか」と聞いた。私は冗談に言っているものとその顔を見たが彼は真顔であった。私は「もっと大きな海がある」と答えたら、ふうんとした顔を

してタバコに火をつけている。

私達はこのまま収容所に入り、近日中には船に乗る事ができるとばかり信じ込んでいた。

翌日行軍が始まったが、それが帰るための収容所と反対の方向に向け歩き始めた。約一時間半歩いた所に収容所があった。そこに入れられた。その収容所には約四千五百人の日本人が収容されていて門の内側の高い場所にスターリンの肖像画が掲げられていた。作業に行く時にその下を通り作業に出た。その作業は主にナホトカの築港作業であった。

私はまた炊事要員であった。ある日の事であった。炊事班長に明日朝飯を炊く薪がない、何とかしなくてはと相談をうけた。収容所内の燃える物は燃えつくされている。どうしても収容所外から持ち込まなければならぬ。班長は困りきついていた。昼の分は何とかなるが朝の分だけで良い、何とかならぬか。私は腹を決めた。それは脱柵するより仕方ない。誰か三人ほど外に来てくれ、私が

先頭に立ち第一の有刺鉄線の柵を越える。次に二メートルぐらいの板塀を越えなければならない。四方の望楼には警備兵が上って監視の目を光らせている。薪のありそうな所場所は私が知っている。その方面の望楼を見た。丁度その望楼の上には兵隊は見えない。私も決死の覚悟が必要だ。第一の有刺鉄線を越えた。次は板塀、これは下を手で掘り、第二難関を突破した。監視兵は知らないらしい。私は小声で三人に出て来いと声をかけた。ようやく四人揃ってその板塀にびったりとくつきながら歩いた。誰も居ない望楼の下まで行き、その角を曲がった。そのとたん、ソ連兵が着剣をして私の胸元に銃を向けた。動哨であった。私はもうこれまでと観念した。

しかし私は何とか切り抜けなければと必死で、片言のロシア語で「俺は炊事要員だが薪が無くて明日の朝の食事に困るんだ」と話した。

なんとそのソ連兵は良い人で、「俺が薪のある所に案内する」先に立って歩き始めた。

私達はそのときほっと安堵の胸を撫で下ろした。帰りは警備つきの薪運搬、何ら怖がることはない、悠々と薪を収容所内に入れ、翌朝の食事に間に合った。班長は随分私に感謝してくれた、

私はこのままいつまでも炊事要員では、帰りが遅くなる事を考え、班長にお願ひして作業班に入れてもらった。私の作業班は全員が元炊事班であった。

毎日スターリンの肖像画の下を通り作業に出た。行った。そのとき収容所から歩いて二、三分の所に日本製品のゴタゴタ物の置場があった。その中に大きな酒樽が置いてあった。そこを通ると酒の匂いがして、何か懐かしくまた腹に染み渡る感じがして故郷を思い出した。

ある日のこと、その樽がいつの間にか壊されていた。次にバラバラになっていた。するとその板が一枚二枚となくなっていく、なくなる理由はその板にしみついている酒を木口からかじるのだ。私もかじってみた、かじっているうちに唾と混じ

ってほんのりと酒の味がしてくる。何とも言えない気分だった。そのうちにその樽はあとかたもなくなっていた。

「特別の作業員出してくれ」と私の班に申し入れがあった。班長に「私が出ます」と申し出て作業に出た。総勢三十人ぐらいだった。ソ連人に引率され、築港作業の反対側に向って歩いた。一時間ぐらい歩いたところで、アンペラ小屋があった。近づくにつれ異様な臭いが鼻をつく。そのアンペラ小屋の前に止まった。ソ連人が鍵を開けた。開けたとたん何と日本人の死体が土間の上に襦袢袴下のままうず高く積まれている。私達は目をそむけざるを得なかった。ソ連人から、私達が一人ずつ担いで山の上に持って行き、そこに穴を掘り埋めると言われた。

どこから連れてこられたのか名前は、部隊は、全部分からない。ただ太っている人はなく、皆痩せて骨と皮の姿であった。アンペラ小屋に入った。その臭いたるや何とも言いようがない。私達は一

人、一人担いで、懇ろに葬った。しかし全部の人を葬ったわけではなく、残った屍はまだ沢山山積みみされていた。

築港作業が毎日続いている。私達は炊事出身者ばかりなので体力も他の人達より持っていた。石積作業は長崎県の出身者で浜田という男がいた。彼は開拓義勇隊の出身で兵隊ではなかった。私の班にはその義勇隊の出身者は二人いた。

彼らは石積にかけては非常に手腕があり、周りを大きく中へは余り石を入れず、うまく積み重ねた。ソ連の監督は外側を計り何リユーベと計算するので周りを大きく見せるのがコツだ。私達は石運搬、彼らは石積作業で、他の班の人達よりはるかに作業量が多く、毎日百パーセント以上の作業を遂行していた。

また石落し作業は山の中腹に石と土とが混っている中腹に宙づりになり、石と土を落す作業だった。私達は一人山の上に見張りを置いておき、その石がいつでも落せる様に仕かけしておく。そ

して監督が来るのを山の上で待つ。来た時は皆に連絡する。監督が来ると同時に一斉に石を落す。監督はそれを見て上機嫌、毎日百パーセント以上の作業率であった。

ナホトカ港には三日おきぐらいに日本の船が入って来る。入港するときは朝作業に行くとき、ナホトカ港にソ連の誘導船が見えない。昼近くになると、その誘導船のあとに日章旗を翻して日本船が入港して来る。私達はその引揚船をいく度見送ったことでありましょう。その度に淋しい思いだった。

ちようど病院船高砂丸が入港したときであった。高砂丸は二、三日停泊して病人を乗せていた。私達はつい、船の側に寄りたくなる。私も近くに行つた。そのとき看護婦が桜の花を船上から投げてくれた。日本人が大勢、船の側に走つた。そのとたん警備兵に銃を向けられ、皆すごすごと職場に戻つて行つたが、そのときは懐かしさでいっぱいだった。

そのときソ連の労働者が測量用のトランシットのレンズを船の方に向けて、私に見ると言つて船上を見せてくれたが、そのとき看護婦が大勢甲板に顔を出していた。その看護婦が全部美人に見える。しばらくぶりで見る日本の女は美人だとつくづく感じさせられた。

高砂丸入港ですっかり郷愁の念がおさまらない二日後ぐらいであったが、次の引揚船が入港してきた。間もなく我々の仲間が乗船を開始し、そして誘導船に従つてナホトカを出港して行つた。

そのとき私達の班は山の上でその一部始終を見ていた。日本船が出港の汽笛を鳴らしたとたん、そばにいた片岡がいきなり船に向つて「俺を帰してくれ」と涙声で叫んだ。そして「何回も何回も来ていれば必ず帰れるよ」と片岡を慰めたが、それは自分にも言い聞かせた言葉であった。

私達も待ちに待つた乗船の日が来た。帰還船は第一大拓丸、その日は忘れる事の出来ない昭和二十二年六月十五日であった。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十一年三月五日千葉県君津

郡佐貫町八幡で出生

現住所 千葉県富津市八幡

軍歴 昭和十八年三月十三日 満州第

四四八部隊へ入隊

満州孫呉にて敗戦

入ソ年月日 昭和二十年八月三十日

引揚年月日 昭和二十二年六月

収容地名 ライチハ

引揚後は自衛隊に停年まで勤務

全抑協運動に役員として参加

富津市の「飢と寒さと強制労働」編集に際し編

集委員として活躍

(千葉県 伊藤 千次)

戦時中、戦後のシベリア回想

千葉県 林 興一

学徒報国隊の腕章を付けて千葉から鶴見の日本鋼管造船所に動員されていた。作業は、海防艦の製造、特殊高速船（肉弾戦用）製造の協力である。午前八時より午後五時まで職場の空気は緊張でいっぱいである。その職場に南方戦線で捕虜になった。カナダ兵が二百人ほど労働させられていた。ほとんど身長一七〇センチぐらいである。食事が合わないのか、下痢に苦しんでいる様である。虚ろの顔々が物陰で「サボって」いた。そんな行動を監視する係が叱責労働させていた。戦争と平和、戦勝国の学生といえどもこの現実、悶々もんもんの中に終着駅千葉であった。それから二、三日その光景が脳裏から消えなかったが、ちょうど六十三年前の学徒出陣の壮行会を想起した。小雨降る中、祖国日本の命運賭けた戦争に一切の感傷を捨て莞爾かんじと